

「市民自治の市政 第2ステージ」を撤回へ

9/8 の市民自治あかし総会で「取り組み方針」を変更

市民自治あかしは、昨年春の市長選挙後に掲げた「市民自治の明石市政は第2ステージへ」という方針は「幻に終わった」と総括し、明石市政に対して取り組んできた方針を大きく変更することを決めました。詳細は9月8日に開催する第12回総会で明らかにし、今後の取り組み方針を議論して決めますが、14年間続けてきた「市民マニフェスト選挙」を基軸に自治基本条例に基づく「市民自治の明石市政」を実現するという戦略は大きく変更せざるを得ないと総括しています。

市民マニフェスト選挙、暗礁へ

市民自治あかしは、2007年に策定検討委員会が始まった自治基本条例制定の動きに対応して、住民自治研究会あかしを起源として幾たびか名称や組織を変更しながら17年活動してきました。

現在の政策提言市民団体は2011年に発足した「市民自治あかし」が「市民マニフェスト選挙」をベースにして14年間継続してきたもので、泉市政の「第1ステージ」を経て昨年5月に発足した丸谷市政を「第2ステージ」と位置づけてきました。

残念ながら、この1年間余の新市政を総括すると「市民マニフェスト選挙」を踏まえた政策提言活動を今後は継承して行けないことが明らかになり、今後の対応や市政に対する市民活動のあり方を再検討せざるを得ない状況に至っています。

15の政策課題も整理し提起

「トークサロン・草の根の市民自治」と題した8日の総会は、会員等の枠を超えて誰でもが参加して明石市政の現状と課題を話し合う機会として開放しています。

今回は明石市政が直面している15の政策課題について現状と課題を整理し、市民として今後どう向き合っていくべきかについても提起しています。また、この1年半近くにおよぶ新市政の基本的な姿勢についても分析を加えて、市民自治あかしや市民の対応についてもその展望をまとめています。

トークサロン（総会）はどなたでも参加できます。事前予約や参加費の必要はありません。当日会場へお越しください

トークサロン・草の根の市民自治

市民自治あかし総会 9月8日(日)

13:30~16:30

アスパア明石 8階・市民活動センター

丸谷市政が発足してからこの1年余の明石市の市政とまちづくりを振り返り、検証・総括する市民自治あかしの2024年度総会（第12回）は、9月8日（日）午後1時30分から明石駅前のアスパア明石8階、市民活動センターで開催します。

総会は例年通り「トークサロン・草の根の市民自治」と題して広く一般の方々にも呼びかけて、誰でも参加できる討論集会として開催します。

この総会は政策提言市民団体として発足以来12回目の総会になります。

市民自治あかしは昨年春の市長交代にあたって「市民自治の明石市政は第2ステージに入る」とその意義と期待を表明しましたが、この1年余の新市政はそうした期待に比べてどう評価できるのか？ 6月23日には第45回市民まちづくり講座で「丸谷市政の1年を検証」する議論も重ねて、総括案のとりまとめ作業は追い込みに入っています。

事前申込は不要。直接会場にお越し下さい。

市民まちづくり連続講座 in 明石は 7年で45回。いったん終了します

市民まちづくり連続講座は2017年7月から今年6月まで、45回にわたり開催してきました。この間16回に及ぶ明石市の「出前講座」では、市の各部局の皆さんにも積極的なご協力を得ました。感謝申し上げます。連続講座はこれでいったん終了します。今後は必要に応じて、学習会や討論集会を開催します。

市立文化博物館のあり方検討会が発足

「ぶんぱく」の現状と課題やコンセプト、方向性など“市博”のあり方を問い直す

明石市は8月16日、文化政策や博物館政策に明るい学識経験者を中心にした「ぶんぱく（市立文化博物館）ありかた検討会」（委員7名）をスタートさせました。今年3月の市議会生活文化常任委員会に、次期指定管理者の選定に併せて「同館の機能や役割、常設展示のリニューアル、施設スペースの有効活用、計画修繕」等について諮問する「あり方検討会」を発足させることは報告されていましたが、5か月後に発足した第1回検討会では「市民が明石に愛着と誇りを持つために、この博物館はどうあるべきか」というコンセプトや方向性を明らかにし、博物館のあり方についての検討を求めて、一歩踏み込んだ諮問になっています。

検討会会長になった藤野一夫氏（兵庫県立芸術文化観光専門職大学副学長）は自治体における文化芸術政策の第一人者で神戸大教授の時代に明石市の文化芸術創生条例や同基本計画の策定に関わりました。会長代理になった五月女賢司氏（大阪国際大学准教授）は博物館の実務経験もある最新の博物館事情に通じたメンバー。佐久間大輔氏（大阪市立自然史博物館学芸課長）は学芸員の重要性とともに、博物館と一緒に走るステイクホルダーの役割が重要であることを強調しました。また、岐阜市の総合文化施設メディアコスモスの総合プロデューサーでもある吉成信夫氏は、市民みんなが関わるシビックプライドセンター化へのプロセスを語りました。

第1回検討会は4名の学識者委員による問題提起が2時間近くにわたって行われ、意見交換しました。冒頭に諮問理由を述べた丸谷市長は、永野副市長ら関係部門のトップらとともに延べ3時間の会議に最後まで臨席し、市議5名を含めた9名の傍聴者に対し、委員からは「市長ら幹部の熱心さと傍聴者の熱い視線に感動した。今後ぜひ詳しく意見を聴いていきたい」とのエールの交換もありました。

検討会は今後、市民WSのほか、ぶんぱく職員や実習参加者らも対象にしたWSを開催し、来年8月を目標に検討会を重ねるとしています。

明石市立文化博物館の経緯

1991年10月 直営で開館

2007年～ 指定管理制へ移行

2016年4月 業務分割方式導入

市の歴史や文化に関する継続性が必要な業務を市の学芸部門が担当し、資料の収集と展示や調査研究、常設展示室、市の歴史に関わる企画展、歴史や文化芸術の普及等の業務に31人を配置している。指定管理者は11人。

「本のまちビジョン」策定へ検討委員会はじまる

2回目の10月には素案、来年2月にはビジョン策定？

明石市は6月市議会の総務常任委員会に報告していた「本のまちビジョン」策定検討委員会を8月6日スタートさせました。「本のまち明石」は2011年5月に就任した泉市長が、明石駅前再開発ビルの核テナントに計画されていた市役所分庁舎計画を変更し、明石公園にあった市立図書館を再開発ビルを中心施設に決めたときから「本のまちづくり」を掲げるようになりました。2013年4月に策定した市民図書館整備基本計画で「図書館を中心とした本のまち明石プロジェクト」を掲げています。

2017年1月に再開発ビルの4階と6階に図書館、5階の子どもフロアに子ども専用図書室を開館し、2階には大型書店も入れました。指定管理委託の図書館とは別に政策局に「本のまち担当」を置き、関連施策をめざしてきました。

ただ、10年経ったこの時点で、今なぜ「ビジョンづくり」なのか？ 図書館の移転新築や「5図書館体制」と呼ぶ計画も審議会等に諮られた形跡はない。5図書館計画は今回の検討委員会の対象にも挙がっていない。しかも、検討委員会は2回目の10月には「素案」を取りまとめて市議会に報告するという。ビジョンの方向性が明確ではない。